

かわらばん 妻入り

事務局

新潟県出雲崎町

教育委員会

☎0258-78-2250

FAX 78-4559

先進地視察 佐渡・小木・宿根木 相川へ

去る6月25日(土)～26日(日)

に、街並保存活動の先進地視察として、佐渡市の小木・宿根木地区及び相川地区を訪ねました。

小木・宿根木地区は、入り江の狭い地形に独自の様式をもつ家屋が密集し、石畳の露路も当時の面影を残しており、国の重要伝統的建造物群保存地区にも指定されています。また、佐渡金山によって繁栄した相川の町には、かつての繁栄を思わせる史跡が数多く残つ

ております。そして、現在佐渡市では島全体を世界遺産とするため運動をしております。

それでは、今回の先進地視察に参加された方の感想を紹介します

先進地視察に参加して

木折町 長谷川 隆

今年度の先進地視察は、佐渡の「宿根木」をメインに選びました。

寺泊からの「あいびす」は、前日からの雨としけの為、欠航かもういふ心配の中出発。多少の船酔い気味の人もありましたが、なんとか赤泊に到着。用意のバスで小木の宿根木集落に着きました。

当地は、出雲崎の協議会の発足当時のシンポジウムにも参加され

ており、平成三年に国の重要伝統

建造群地区に指定され、「宿根木を愛する会」が組織されております。

その会長さんの案内により公開されている廻船問屋の「清九郎」、三角家、軒下飾り等を視察、その後懇談会となりました。国の指定を受けたときの苦労話や、限界集落

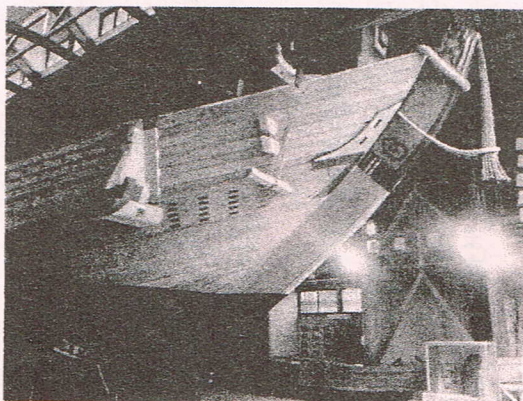
となつている今後の対策等、色々悩みも共通している部分もありました。そして十一月に出雲崎で開催されるまちなみネットワークの総会で又お会いすることを約束し

て終わりました。

その後、千石船の「白山丸」の展示を見学。計画の段階から携わっていた熱意ある方から説明を受け、特に長さ二十二mという杉丸太の帆柱には目をひかれました。

二日目は、朝から雨降りの中出発。金山から佐渡奉行所への街道「京町通り」を、地元ガイドさんに案内していただきました。金山からの最初の山道は、雨の中、ずぶ濡れになりながらの非常にきつい三時間の行程となりました。終点の奉行所に着いた時には、靴下まで濡れ、素足になつて案内をしていただきました。この京町通りは、富山の八尾の盆踊りにヒントを得て、相川音頭でこの通りを流して大好評だったようです。

二日間を通しての感想は、佐渡の関係者は、世界遺産の登録を目指して非常に強い熱意で取り組まれており、案内をいただいた方からも、それを強く感じられました。

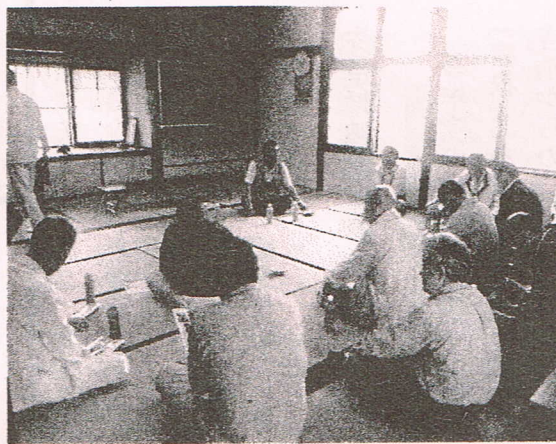


佐渡(宿根木)への先進地視察について(一日目)

石井町 野崎 勝彦

百目傘をさして、雨の降りしき
 中でしたが佐渡汽船(寺泊→赤
 泊)には影響がなく運航となり予
 定どおりの六月二十五日(土)(小
 木・宿根木)二十六日(日)(相川)
 へ十四名での先進地視察ができた
 した。宿のバスで小木、宿根木に
 入り地元団体(宿根木を愛する会)
 案内による街並散策と交流会を行
 いました。一村が千石船産業の基
 地として整備され繁栄した当時の
 の集落形態が今日見られる宿根木
 の町並。村を流れる称光寺川と平
 行し数本の小路が海へ向かいそれ
 に面して家屋が建っています。出
 雲崎町と同様に密集しています。
 家屋の外壁は濃い茶色で塗られ
 (縦張りの雨板が特徴的でした。)
 屋根は島内の杉を、使用したコバ
 を敷きその上に石を置く(ボルト
 で固定)昔風の町並を再現してあ
 りました。七十才以上が集落の約

半分をしめ、高齢化が進み空き家
 が増え(28世帯120人)で、限界集
 落ですが平成三年重要伝統的建造
 物群保存地区に選定され行政から
 の90%支援もありやってきてい
 ます。町並案内には中学生のボラ



ンティアを育てています。千石船
 「白山丸」(安政五年(一八五八)
 に宿根木で建造された「幸栄丸」を
 当時の板図(設計図)をもとに忠
 実に実物大に復元し地元の白山神
 社にちなんで「白山丸」と名付け

た。)建造にも力を入れています。
 出雲崎(宿根木)は海をへだてて歴
 史がありますが、佐渡金山の世界
 遺産登録に向ける橋渡しとなり今
 後友好的な関係ができればと思い
 ます。

追記 宿根木の千石船をつない
 だ船つなぎ石数ヶ折の湾は、人工
 的なテトラポット等の工事はしな
 いそうです。当時のままにして残
 したいと説明がありました。

先進地視察に参加して(二日目)

井鼻 松永 信義

二日目、小雨の降る中、相川・
 金銀山の鉱山跡へと向かう。有名
 な露頭堀り跡である「道遊の割戸」
 の見える駐車場で、相川町ふれあ
 いガイドによる説明を受ける。

慶長六年(一六〇一)大金銀鉱
 脈が発見されると、わずかに二・三
 年で、数万人が働く町が山中に出
 現した。慶長九年(一六〇四)代
 官、大久保長安は、海岸段丘の先
 端に大きな敷地の陣屋(後の奉行

所)を建て、佐渡一国天領の拠点
 とした。以後四〇〇年にわたり、
 相川は金銀山の町として大きく発
 展していく、と言うような簡単な
 説明の後、京町通りと云う、街並
 をガイドさんの案内、解説を受け
 ながら、歩き始める、神社や寺、
 民家の敷地内、道筋などあちこち
 に「金銀座員大盛(ざか)り」の
 名残り「石」がある。「叩石(たた
 きいし)、磨石(すりいし)、石臼」
 等のことである。掘り出された鉱
 石を叩いて砕いたり、細く磨りつ
 ぶすための道具であったとの事、
 使いこまれた後に敷地の境界や斜
 面の土留等に再利用された「石」
 との事、等々説明を受けながら、
 復元された、佐渡奉行所へ行く。
 金鉱石が小判になるまでの、その
 行程の膨大さと難儀さは想像を絶
 する。採掘から製品「小判」まで
 の一連の作業は、人力で行なわれ
 た。「黄金」への執念か。また徳川
 幕府三百年の維持、財政的に支え
 ていたのは佐渡の金山なのと言

とても過言ではない。二時間半ほどのガイドと奉行所での説明を終わり、佐渡金銀山の歴史「四百年」に圧倒された。

今、新潟県、佐渡市はこれら佐渡鉱山の遺産群を世界遺産登録に向けた取組を進めている。今回視察に参加し、是非、登録を受けるよう祈ります。

出雲崎くよこまつ

今年度は、出雲崎小・中学校、及び役場にあわせて14人の方が新しく赴任されました。そのうち、3人の方から、出雲崎町へ来ての感想をお伺いしました。

想 出雲崎大祭に参加して

出雲崎小学校

校長 松永哲郎

良寛記念館前を大きく曲がって下る道から見る妻入りの街並が好きである。廻船が入りしていた頃に時が遡る錯覚さえ覚える。用

があつて街並の中を車で走ると、心が安らぐのを感じる。とても懐かしい気持ちになる。それは故郷の高田の雁木通りの街並を思い出したからだ。私が生まれ育った高田の町屋は、二間半間口のウナギの寝床といった長い造りで、ここと似ている。ちがうのは、隣の家とは隙間がなく、壁で仕切られていることと、玄関が幅一メートルほどの雁木造りとなっていて、人が自由に通れることである。

私の中の妻入りの街並が一変したのが、出雲崎大祭である。一年生から六年生まで合計百七十一名の子どもたちが参加した。役割は楽人、弓持ち、鷹持ち、樽御輿とそれぞれだったが、一緒に参加した中学生と合わせて三百名近くの多数となった。私はこの大祭をすべて見てみたいと思い、子どもたちと一緒に歩いてみた。

強い日差しの中、中学生や高学年がリードして御輿を担ぎ、低学年の子どもたちがうちわで扇ぐ。



さすがに後半は一年生の子どもたちには疲れの様子が見える。しかし大人御輿も加わって、熱気あふれる雰囲気には押されるようにして、子どもたちは、元気を振り絞る。そんな時、「先生」と思われぬ所から声をかけられる。最初はわからなかったが、「先生、私です。覚えていますか。」見れば、私がまだ二十代だった頃の教え子が妊娠した姿で祭りを見学していた。出雲崎に嫁いで来たとのこと。短い時間ではあるが、懐かしい思い出話を

した。

祭りの最後に震災で避難してきた子どもに祭りの感想を聞いてみた。うれしそうに「とっても楽しかった。」と言。きっと出雲崎のことは一生忘れないだろうと思った。

今も変わらぬ出雲崎と変化する
出雲崎

出雲崎中学校 仁保 宏明

この春に、十四年ぶりに出雲崎中学校に赴任しました。着任後、最初に確認した場所は、グラウンドです。平成六年、文部科学省指定の「道徳教育発表会」で作成した良寛生涯大壁画の様子です。当時、原案作成から始まり下書き、色付けと夏休み中も活動したことが記憶に残っています。その記憶がさらに鮮明によりみがえってくるほどきれいな状態で、うれしくなりました。

グラウンド内で大きく成長していたのが桜です。スコップではな

かなか作業が進まない固い地盤に生徒と穴を掘りました。細く、頼りない苗木が成長してくれるのだろうかと心配でした。しかし、どの苗木も力強く根を張り、立派な花を咲かせ私を迎えてくれました。このような環境では、放任していても維持できません。伝統や文化を残し、成長させてくれる出雲崎中の生徒や出雲崎の町民の皆様への心豊かなさを感じました。苗木のようだった当時の生徒も少し立派になり、町のために働いている卒業生もいます。独身が多く、桜のように早く花を咲かせてくれることを願っています。

さて、学校には当時と変わらないう良さを感じました。町に出てみると街並みの変化に気付きます。海岸の教員住宅に住んでいましたので、妻入りの街並みには愛着があります。道路がきれいにカラーコーディネットされ、くるまで通ることをためらいます。四〇二号線の岸壁に糸を垂らせば、夕食の

豆アジが釣れたことも懐かしさの一つです。

この三ヶ月間で見えた出雲崎の変化は、ゆつくりと着実な変化です。少子高齢化の影響なのでしょう。しかし、良さを守りながら、少しずつ進化する出雲崎を一年かけて実感できる楽しさができました。



「妻入りの街並みを眺めて想うこと」

出雲崎町役場町民課

池田 ひろ子

出雲崎町で生活し始め、早いも

ので4カ月が経とうとしています。私が出雲崎町に来て始めたことがあります。それは仕事の後に海岸沿いをランニングすることです。

きっかけはダイエットのつもりでしたが、日没後の薄明るい時間帯、遠くに故郷佐渡ヶ島を望みながら、趣ある街並みを走ることが、今では楽しみの一つになっています。

妻入りの街並みを走りながら改めて感じることは、街並み自体の保全だけでなく、地域に伝承された文化や技術も含めての維持保全活動の重要性です。

歴史的風致を保全し、観光振興につなげる取り組みは各地で活発です。その中でも評価されているものの多くが、単に歴史的建造物を保存・修復するだけでなく、その地に根ざしてきた文化や技術、生活様式を含めて総合的に維持保全している取り組みです。

出雲崎町では、情緒ある景観を整備していくハード面とともに、祭礼行事などの歴史・文化も語り

継こうというソフト面の活動も充実していると感じます。

今年の1月、私は父と北国街道妻入り会館を訪れました。その際開催されていたのが、天神様像の展示でした。不勉強な私は、このような風習が出雲崎町にあることを知らなかったのですが、地域固有の歴史を地元の方々が大切に守り続ける活動は大変意義深いことだと感じました。

人々の生活や生業のなかで長い時間をかけて守り育ててきたものの持つ価値を再認識し、固有の歴史文化資源を地域住民が主体となつて、生活空間の中で保存・継承していくことに、歴史文化を生かしたまちづくりの意義があると思います。

豊かな自然と人々の生活が調和し、育まれてきたこの風情を継承していくことが、私たち若者に課せられた使命なのだと、この街並みを走りながら想う今日この頃です。

妻入りの街(四十二)

住吉町 磯野 猛

人物往来 新保民八(二)

昭和五年欧米各地を視察旅行の二人、一人は後の花王石鹼の社長となった長瀬富郎さんとパリやロンドンをいった先進地の商業形態を観察して各地を廻りました。この間の感想を出雲崎の恩人鳥井儀資さんの所へその土地の様子や特にキリストに関する教会の事など送っておられました。

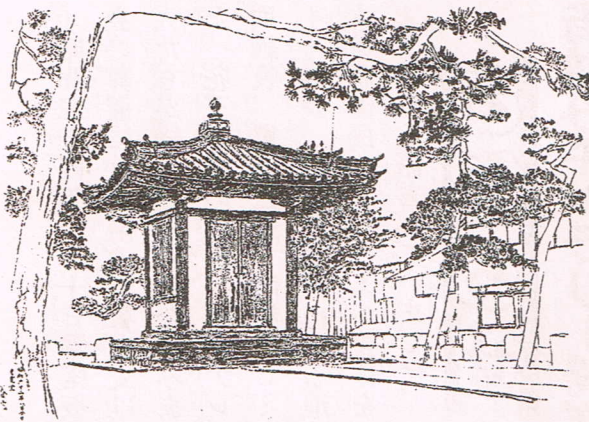
新保さんには弟さんがいて札幌に住んでおられました。後年の昭和五十年ころ鳥井さんからお借りした民八さんの書簡をお見せしたら非常に喜ばれたことがあります。鳥井さんへの民八さんの書簡は膨大なものでした。

実に美しい文字で、その土地の特徴や風景などを書いておられました。しかも常に謙虚な言葉でクリスチャンらしい文章が至るところに書かれていました。

日本へ帰国した民八さんは早速

花王石鹼へ入社、欧米各国で学んだ知識を生かした商売の道へと発展して遂には日本の花王石鹼まで築きあげられたのです。

その後昭和十年ころ、これから日本でもコーヒの時代が来ると予見して、ブラジルコーヒの会社招かれ宣伝活動をはじめられました。昭和十五年、十六年と戦時体制が強く、反米・反英思想が日本中に広まったのでこのコー



ヒー業界も解散される運命となりました。

昭和十六年十二月八日の日本とアメリカの戦争により日本の経済は大混乱を招きました。軍部の強気な政権は、国民の生活を無視して兵器生産に多くの職業をもつ人、農家、漁業者、鍛冶職、商家を無差別に軍需産業のため徴用という政策で強制的に国家の為という名目で兵器生産の全国の工業都市へと送り出しました。英語、外国語は禁止、音楽も軍歌か童謡以外は禁じられ、ジャズなどんでもない軟弱文化だと咎められました。農家であろうが漁業者であろうが一定の体格で健康な若者たちは徴兵制度で陸軍か海軍に行かされるという時代でした。米を作る人も漁業をする人も年寄りばかりで、今のような機械化の時代ではありませんから、能率も悪く食糧事情も悪く日本中栄養不足による病人が増加しておりました。それでも政府は日本は神国であるから絶体

に勝つ、などと宣伝、世界中を相手に戦争をするような破目になっていました。

このような時期、民八さんは自分の不健康のため軍人になれぬことを知って仕方なく軍属と云って戦争をするための物資の輸送とか軍部の雑用人夫のような形でビルマ(現ミャンマー)に徴用とされ従軍し昭和十八年帰還されました。そして再び花王石鹼に入社、長瀬さんの下で常務取締役としてすごされます。当時石鹼は軍隊でも使う必需品でしたから少ない資源で石鹼を製造することは許可させていたのです。

昭和二十年八月、広島・長崎の原子爆弾投下で遂に日本は降伏して戦争は終わりました。私たちの近くの長岡市でもアメリカの空爆により全市焼滅とあまりにも戦争による被害は大きなものでした。

経済もこの混乱期を抜け出すのに十年近くかかりました。この時代私たちの町出身の新保民八さ

んが日本商業界のために立上がられたのです。昭和二十四年、雑誌「商業界」の創刊に加わり、低迷した日本の小売商業界のため活躍されるのです。民八さんの理論的な指導で日本中の小売商の人々からの講演依頼が増え、情熱的な講演には何百人では足りない会場が増加、昭和二十六年ころは箱根の会場では千人をこえる聴衆が集まり、その講演に涙を流す人々が多く感動の坩堝と化したと当時の様子が記録されています。

その根本には人間の善意と愛が貫かれていたと伝えられております。そして郷土の良寛を常に心の中に抱き、愛護の精神と自からの信仰心を結びつけ、正しいものは滅びないという信念を人々に語られていたのです。

しかしこの年に三百回をこえる講演が民八さんの健康を損ね遂に昭和三十三年十二月二十五日、クリスマスの日東京医大病院で五十七年の生涯を閉じられました。

昭和三十四年一月十日靈南坂教会の葬儀には全国の影響を受けた人たちが民八さんの死を悼みました。花王石鹸の社長、読売テレビ取締役、電通社長、商業界ゼミナール会長、商業界主幹による追悼文は新保民八という人の全体をあまり所なく語られていました。

お知らせ

街並みギャラリー開催

私たち協議会では、毎年十月に「街並みギャラリー」として、十月に東京藝術大学大学院生による街並みスケッチ画を妻入りの町屋で展示しております。今年度町屋だけでなく、出雲崎町民体育館でも絵の展示を行いますので、皆さま是非ご鑑賞ください

町屋での展示

十月八日(土)、九日(日)

町民体育館での展示

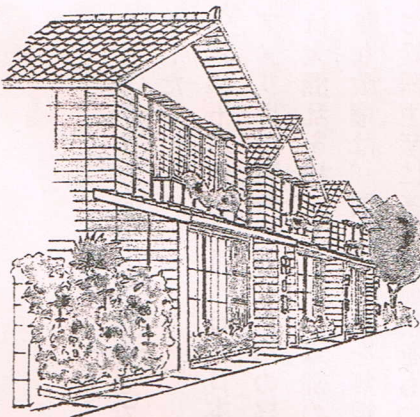
十月八日(土)～十日(月・祝)

まちなみシンポジウム開催

毎年、新潟県の街並保存団体が集まって行われる「まちなみシンポジウム」を今年度は出雲崎町にて開催いたします。松蔭大学観光文化学部 古賀学教授による基調講演や、県内の街並保存団体による取組の発表などを予定しておりますので、皆さま是非おいでください。

日時 十一月十九日(土)
(シンポジウムは14時30分からの開始です。)

場所 越後出雲崎天領の里
時代館



あとがき

東日本大震災の復興、復旧について政府は(政治家達)は何をしているのか解りません。人の足を引っ張ったり、派閥の争いなど、いい加減にして欲しいです。

国民の安全と安心を最優先しなければならぬ時に、子供喧嘩のようなことをして恥ずかしくないのでしょうか、疑問に思います、さて、話は変わって、昨年より早く猛暑になり、熱中症になり救急車で搬送される人が多くなっているそうです。

外より室内で熱中症になる方が多いそうです。節電の呼びかけなどで、我慢してエアコンなどを使用しないことが原因の一つということです。

まだまだ暑い日が続きますので無理な節電はしないで体に気をつけてください。水分も多めに取りましょう

石井町 納谷 稔